特集1

「果樹王国やまなし」のブランド化に向けて

江戸の市場で大きなシェアを占めていた「山梨の果物」。先人達の努力を引きつぎ今では世界の舞台で輝きを増しています。

江戸時代から名をはせた「山梨の果物」

長い日照時間や昼夜の温度差が大きい気候、水はけのよい土壌などを生かし、山梨では古くから果樹の生産が盛んに行われてきました。

江戸時代の資料「甲斐叢記（そうき）」では、当時の山梨の代表的な果物として、ブドウ、ナシ、モモ、カキ、クリ、リンゴ、ザクロ、クルミが紹介されています。

この八つの果物は、当時の日本ではとても珍しく貴重だったことから「甲斐八珍果（はちちんか）」と呼ばれていました。「八珍果」の名称は、江戸時代に甲府の藩主となった柳沢吉保が、生産を奨励するために名付けて、江戸の市場への出荷を奨めたという言い伝えもあります。

山梨産の果物は、都市に近接した地の利を生かして江戸の市場で大きなシェアを占め、当時から果物の産地としての名声を得ていました。

明治期以降には産業振興の流れに乗って、果樹の栽培に力が入れられ、収穫量が増加するとともに、スモモやサクランボ（オウトウ）など新しい種類の果物も作られるようになりました。

このように果樹栽培が盛んな山梨でも、戦後しばらくは養蚕が盛んに営まれ、畑の多くでは桑が栽培されていました。

その後、昭和40年代に高度成長期を迎えると、人々の食生活の変化により果物の需要が増加したことから、県内の各地で養蚕から果樹栽培への転換が進み、現在の「果樹王国やまなし」の礎を築きました。

現在の山梨を代表する果実としては、ブドウ、モモ、スモモ、サクランボの4品種があります。

ブドウの栽培は特に歴史が古く、1300年前から始まったといわれています。栽培面積、生産量とも日本一。品種が豊富でさまざまな味を楽しむことができます。

モモの栽培の記録は江戸時代からあり、栽培面積、生産量とも日本一で、7月の東京中央卸売市場では本県産が約90％を占めています。

スモモも古くから栽培され、栽培面積、生産量ともに日本一となっています。

また、サクランボは栽培の南限といわれ、5月末から観光もぎ取りが楽しめます。

甲斐叢記に載った「甲斐八珍果」

新品種開発に取り組む「果樹試験場」

笛吹川フルーツ公園に隣接する果樹試験場は、本県の果樹農業の研究機関の中心として、これまでに数々の新品種を開発し新しい栽培方法を普及するなど、果樹王国やまなしの発展に大きな役割を果たしてきました。

果樹の品種改良は、既存の優れた品種同士を交配し、生まれた苗木から優秀なものを選抜してさらに改良するという作業を続けていくため、新しい品種として登録できるまで、十年以上にも及ぶ年月が必要となります。

このような長期にわたる品種改良を通じて生み出され、山梨県のオリジナルの品種として登録された果物を紹介します。

果樹園に囲まれた果樹試験場

果樹試験場が開発したオリジナル品種

サマーエンジェル

平成17年に品種登録されたスモモの新品種で、甘みが強く果汁が多いためジューシーな味わいで人気があります。

サマービュート

平成17年に品種登録されたスモモの新品種で、甘みが強く酸味もある濃厚な味わいが特徴です。

富士あかね（商標登録）

平成18年に品種登録されたサクランボの新品種で、強い甘みと酸味を兼ね備えた濃厚な味わいが特徴です。（品種名 甲斐オウ果1）

夢しずく

平成16年に品種登録されたモモの新品種で、甘みが強く果汁が多いのが特徴であり、ジューシーで食べ応えのあるモモとして人気があります。

INTERVIEW

力強い産地をめざし、21世紀の果樹技術を発信！

果樹試験場
場長 櫻井 健雄さん

果樹試験場は、昭和11年1月に東山梨郡で発生したブドウとカキの大凍害が契機となり、昭和13年12月に農事試験場園芸分場として開場されました。当初は総員3名、総面積2・7haの小さな組織でしたが、創設71年目を迎えた現在では、総員56名、総面積17haとなり、ブドウ・モモ・スモモ・サクランボのオリジナル品種の開発・育成、栽培技術の改良・開発、病虫害などに関する研究活動と、研究成果の速やかな普及・定着に向けた活動を幅広く展開しています。

なかでも、試験場内に醸造施設を有し、ブドウ栽培からワイン醸造までを一貫して行う醸造用ブドウの研究体制は全国的にも珍しく、その成果も注目されています。

また、樹形をコンパクトにして省力低コストで栽培する技術を開発・普及するなど栽培農家の高齢化や後継者問題にも対応してきました。平成16年度からは生食用ブドウのオリジナル品種の開発にも精力的に取り組むなど、山梨ブランドの確立にも力を注いでいます。

ところで、近年の地球温暖化は、ブドウの着色やサクランボの結実などさまざまな面で影響を及ぼし始めています。当試験場では、問題が深刻化する前から栽培環境の変化に対応できる生産技術の確立や品種の改良・開発、さらには環境に優しい病害虫防除技術の実用化にも努めてきており、近々、研究の成果を皆さんにもお知らせできると思います。